

トルコギキョウの害虫

1 チョウ目害虫（ガの仲間）

（1）ウワバ類（*Autographa sp.*）

〔発生状況〕

トルコギキョウではガマキンウワバの加害が知られているが、本県ではタマナギンウワバとケイギンモンウワバが確認された。

タマナギンウワバの発生回数は東北地方で年3回。寒・高冷地では成虫及び幼虫で越冬するとされ、休眠性はない。

〔被害の様子〕

葉は小さな穴をあける程度で被害としては大きくないが、花卉を好んで食害し、花卉に穴をあけながら花から花へ移動するため、開花時期には注意を要する（写真1, 2）。幼虫は集団で発生することはない。幼虫の体色は黄緑色で、群生すると黒っぽくなる。体の後半部が太くなっており、腹脚が2対であるため、尺取り虫のように歩行する（ヨトウ類は腹脚が4対）。

〔防除対策〕

施設開口部に防虫ネットを展張し、産卵にきた成虫の侵入を阻止することが効果的だが、施設に侵入してしまった場合は、加害痕や幼虫寄生を見て薬剤防除を行う。

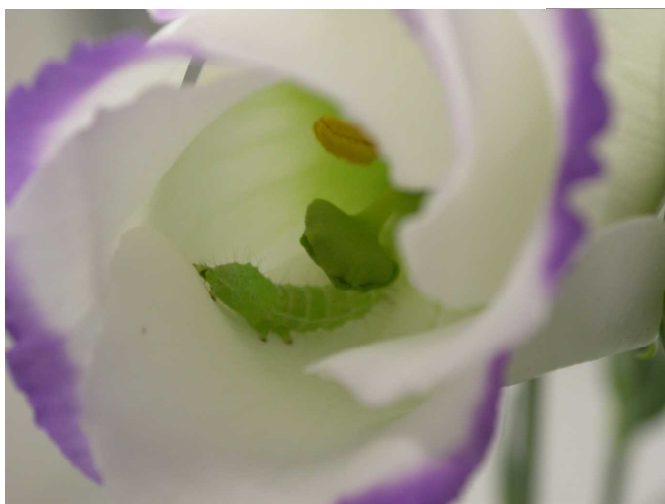


写真1 花を加害するウワバ類



写真2 ウワバ類幼虫

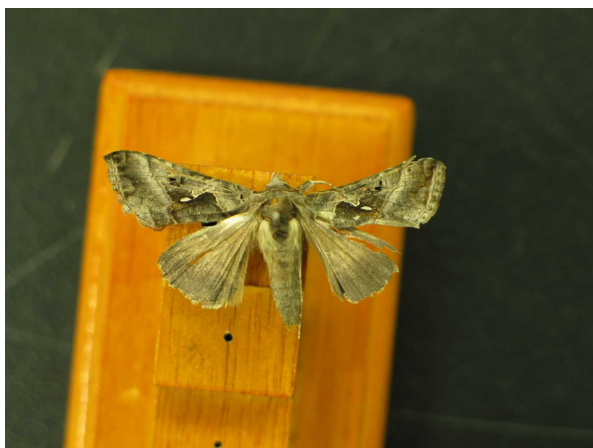


写真3 タマナギンウワバ成虫

(2) ハスモンヨトウ (*Spodoptera litura*)

〔発生状況〕

幼虫は広食性で、多くの野菜類、花き類を加害する。休眠性が無く、加温施設では冬期も発育、加害を続ける。暖地性の害虫で、関東、東海地方以西で発生が多く、本県では8月中旬以降に被害が多くなり、気温の低下に伴って発生は収まる。

〔被害の様子〕

卵は葉裏に卵塊で生み付けられ、成虫の鱗毛に覆われる(写真4)。ふ化した若齢幼虫は集団で葉裏から表皮を残すように加害する(写真6)。幼虫の体色は灰暗緑色～暗褐色と変異に富み、開花期には花や蕾も食害する(写真5)。

〔防除対策〕

施設開口部に防虫ネットを展張し、産卵にきた成虫の侵入を阻止することが効果的だが、施設に侵入してしまった場合は、幼虫寄生の初期に見られる食害痕などを目安に薬剤による防除を行う。ただし、幼虫の齢期が進むと薬剤の感受性が低くなることに加え、日中は日陰や地際部に潜み夜間に加害するため、薬剤がかかりにくくなり効果が十分発揮されない。



写真4 葉裏に生み付けられた卵塊



写真5 花を食害する幼虫



写真6 ハスモンヨトウの被害状況 (左)

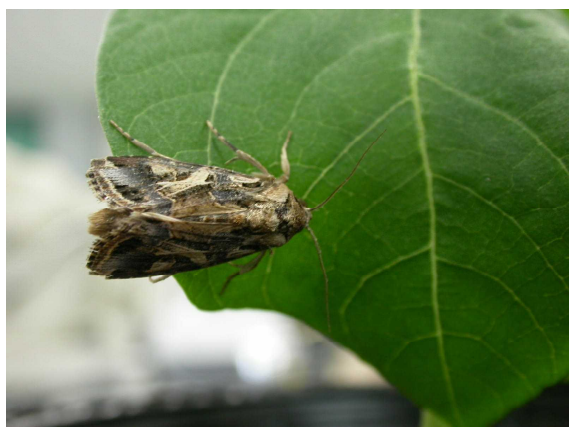


写真7 ハスモンヨトウ雄成虫 (上)

(3) オオタバコガ (*Helicoverpa armigera*)

〔発生状況〕

ハスモンヨトウと同様に広食性で、多くの野菜類、花き類を加害する。葉を食害するほか、新芽や花蕾、茎などに潜って食害する。本県では1997年以降、トマトやキクで発生が目立つようになった。例年6～7月頃から被害が見られるようになり、トルコギキョウでは8月に開花する作型で被害が大きい。

〔被害の様子〕

成虫が卵を1個ずつ点々と産卵し、幼虫は花蕾や花を好んで食害するため、施設に雌が侵入すると被害が大きい。幼虫の体色は淡緑色から茶褐色まで変異に富む(写真9)。

〔防除対策〕

ハスモンヨトウと同様に防虫ネットによる侵入阻止の効果が高い。花蕾等に食入すると薬剤がかかりにくく被害も大きくなるため(写真8)薬剤による防除は発生初期に成長点や花蕾を中心に行う。



写真8 花蕾での食害痕

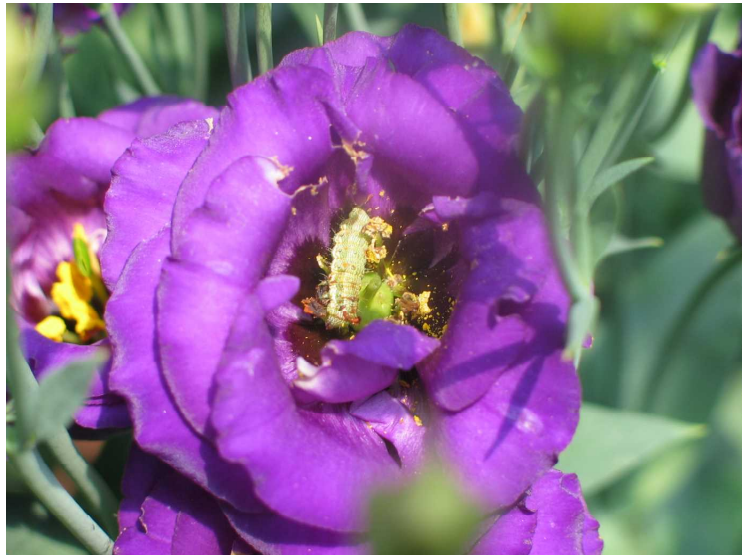


写真9 花を加害するオオタバコガ幼虫



写真10 オオタバコガ成虫

2 アブラムシ類

〔発生状況〕

本県ではワタアブラムシの寄生を確認しているが、モモアカアブラムシの寄生も考えられる。この2種は寄主範囲が広く多くの作物に寄生し、CMV、BBWV等のウイルス病を媒介する。イチゴなどの加温施設では、冬期間も増殖し被害が発生する。

〔被害の様子〕

アブラムシによる直接被害は新梢、新葉、花等の吸汁による著しい生育抑制、また植物によっては葉や芽に奇形を生じる（写真11、12）。間接的にはアブラムシの排泄物(甘露)にすす病が発生し、茎葉を汚すほか、ウイルス病に罹った雑草や作物で増殖したアブラムシの飛来によるウイルス病の罹患がある（トルコギキョウの病害ウイルス病参照）。

〔防除対策〕

- 1) 施設周辺の雑草（特に宿根性）を防除する。また、施設内へ観賞用植物等の持ち込みをしない。
- 2) 施設開口部を防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の侵入を防ぐ。

注) 定植時の粒剤（殺虫剤）施用は、保毒虫の飛来・吸汁を妨げられないので、ウイルス病の感染を防ぐことはできない。



写真11 頂芽に寄生するワタアブラムシ
寄生により葉の奇形が見られる。

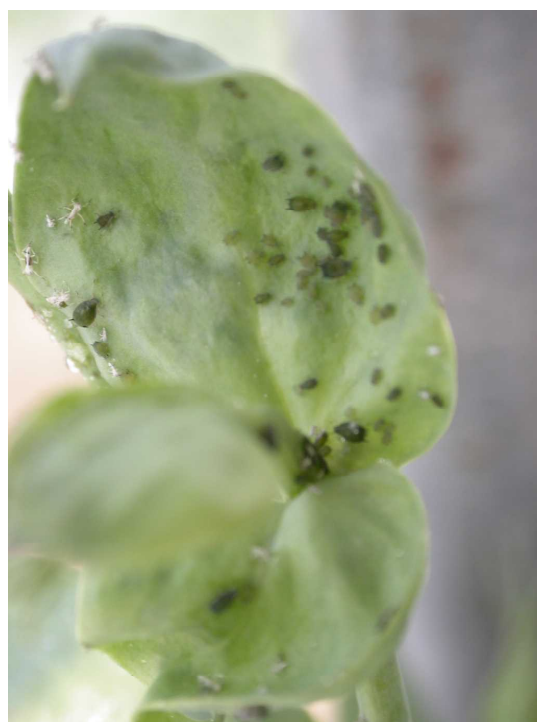


写真12 頂芽の拡大写真

3 アザミウマ類

〔発生状況〕

本県では、花にはヒラズハナアザミウマとネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマの3種が主に発生しており、葉にはネギアザミウマとミカンキイロアザミウマ、チャノキイロアザミウマが見られる。

〔被害の様子〕

アザミウマ類の直接的な被害は、花や葉のカスリ状の食害痕であり、特に花色の濃い品種では問題となる（写真13, 14）。なお、ミカンキイロアザミウマ（写真17）やヒラズハナアザミウマ（写真18）、ネギアザミウマ（写真16）はウイルス病を媒介し、葉や茎に「えそ症状」を引き起こして価値を著しく下げるので注意が必要である。チャノキイロアザミウマの食害痕は新葉の萎縮や葉が褐色に変色するなどの特有の症状を引き起こし、被害程度が大きい（写真15, 19）

〔防除対策〕

- 1) 施設周辺の雑草の防除。また、施設内へ観賞用植物等の持ち込みをしない。
- 2) 0.6mm目合い以下の防虫ネットで施設開口部を被覆しアザミウマ類の侵入を抑制することが望ましい（特に育苗期間中に保毒虫の飛来があると被害が大きい）。なお、赤色防虫ネットは目合いがやや大きくとも侵入抑止効果が高いとの報告がある。
- 3) 定植時にアザミウマ類に適用のある粒剤（殺虫剤）の施用する。また、葉の加害が認められたら薬剤防除を行う。

注）アザミウマ類が媒介するウイルスグループはウイルスを永続伝搬するので、管理作業で出た残渣や感染株はほ場に放置しない。

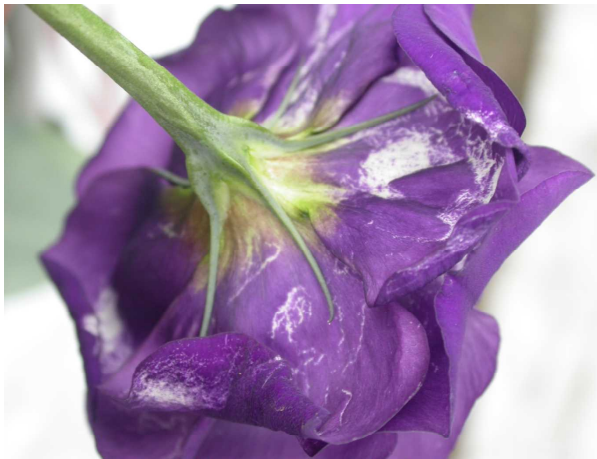


写真13 花卉の食害痕



写真14 葉の食害痕



写真15 チャノキイロアザミウマによる
がく部の被害状況
新芽や蕾の生長停止やかさぶた上の被害
が生じる。



写真16 ネギアザミウマ (*Thrips tabaci*)
アイリスイエロースポットウイルス (IYS
V) の媒介種。広範な作物に寄生、加害する。



写真17 ミカンキイロアザミウマ
(*Frankliniella occidentalis*)
1994年に本県への侵入が確認された北米
原産の害虫。インパチエンスネクロティッ
クスポットウイルス (INSV)、トマト黄化え
そウイルス (TSWV) を媒介する。



写真18 ヒラズハナアザミウマ
(*Frankliniella intonsa*)
トマト黄化えそウイルス (TSWV) を媒介
する。(INSVも媒介できるが、保毒効率が
低いといわる)



写真19 チャノキイロアザミウマ
(*Scirtothrips dorsalis*)

芽や新葉など、若い組織を好み、開花した花卉は加害しないといわれる。

4 ハダニ類

〔発生状況〕

ナミハダニの発生を確認しており、カンザワハダニの発生も考えられる。

〔被害の様子〕

他の作物と同じように、寄生すると葉にカスリ状被害を生じるが、被害程度はイチゴやキュウリほど大きくならない。



〔防除対策〕加害痕を確認したら早めに薬剤防除する。

写真20 ナミハダニ雌成虫